嵯峨の屋おむろ『守銭奴の肚』の翻刻および注釈（1）

三川智央

はじめに

嵯峨の屋おむろの小説『守銭奴の肚』[1]は、明治二十年一月に東京の大倉孫兵衛により刊行された。作者である嵯峨の屋（矢崎鎮四郎）は、明治十九年五月、二葉亭四迷（長谷川辰之助）に誘われて初めて坪内逍遙を訪ね、それ以降、逍遙の指導を受けながら小説家を志していた。この『守銭奴の肚』は、そのような状況の中で成立した、嵯峨の屋の最も初期の作品である。[2]従って、本作品は、嵯峨の屋研究という視点からだけでなく、逍遙や二葉亭の文学との関係も含め、近代小説の草創期ともいえる明治二十年前後の小説の実態をとらえようとする点においても、非常に興味深い作品であるといえる。

しかし、『守銭奴の肚』は、明治二十年の刊行以後、全集等に翻刻されることのないまま現在に至っており、詳

細な研究を行うための基盤がいまだ整っていない状況にある。[3] そこで本稿では、研究の第一歩として、『守銭奴の肚』の翻刻を行うとともに、注釈を試みることとする。不十分な点については、広くご批正とご教示をお願いしたい。

なお、翻刻は、次のような原則に従って行った。

・架蔵本『守銭奴の肚』（明治二〇年一月、大倉孫兵衛刊）を底本として用い、必要に応じて国文学研究資料館蔵本（近代書誌・近代画像データベース）および国立国会図書館蔵本（国立国会図書館デジタルコレクション）を参照した。なお、この三冊については、管見の限りで異同は認められなかった。

・小説の題名の角書きの部分、および本文中の割り注の部分については、印字の都合上、一行に直して表記した。

・変体仮名については、印字の都合上、現行の仮名字体に直して表記した。また、「こと」の合字（合略仮名）についても、印字の都合上、「こと」に直して表記した。

・漢字については、印字できる範囲で、なるべく元の字体を用いた。

・長音符号として用いられている「引」の文字については、そのまま直さずに表記した。

・判読できない文字については、その部分を□で補った。また、誤植や脱字と思われる部分については、そのまま直さずに表記した。

・【表紙】については、複数行にわたっている表記を、わかりやすいように一行に直した形で翻刻した。その際、改行部分は「／」で示した。

〔注〕

（1）題名の表記は、刊本の内題（巻首題）に従い、角書きの「浮世人情」は省略した。

（2）『守銭奴の肚』の成立および出版に関しては、拙論「嵯峨の屋おむろ初期作品の成立および出版に関する考察―『守銭奴の肚』『ひとよぎり』『美人の面影』『苦樂の鏡』―」（同朋大学人文学会『同朋文化』第一三号、二〇一八年三月）において、詳細な考察を行った。

（3）影印本としては、国文学研究資料館から二〇〇八年三月に発行された『リプリント日本近代文学134　浮世人情　守銭奴之肚』（オンデマンド方式により出版）がある。

翻刻

【表紙】

春の屋主人補助／嵯峨の屋主人作／浮世人情　守銭奴之肚　全[1]

【他序】

守銭奴の肚の序

銭を藏めて使用ふことをしらず大事に箱のうちにとツとく者あれば皆人にがりきツて赤にしめとそしる才を抱いて用ふる事を嫌ひ之をいたづらに韜むものあれば隠士よ君子よと或はいふめり銭といふも才といふも共に用ひてこそ尊かるべけれ空しく藏めおきて何の徳かある聖門の教を嚙たがへたる族が件の道理を無差別に見做して偏頗の品[2]

評を下したりしぞおかしき我友さがのや御室ぬしは夙に小説に首ツ丈はまりて而も溺れざる堅固なる持前さてこそ兎もすれば才を吝みてまだ〳〵予の筆はおさない程になどと容易に腕前を見せられざりしが竟に豁然と大悟ありしと見えて年来積おきのお肚の珠玉を紀文宜しくの氣前をあらはしバンラバラ〳〵と蒔はじめられたり但しこれは真の手文庫の小使錢ちよツと様子見に散されたのであればこれから一の庫二の庫奥庫何等の寶物がツン出やうもしれぬ嗚呼樂しきはけふより後なり小説界濕ふべし稗史道は蘇生らん時も時年の始なりめでたしめでたしと祝して序す

一月初旬　　春のや主人おぼろ

【自序】

守錢奴の肚の序

造化の翁が神通[1]妙智力の配劑にすがりて娑婆に宿借する店子衆の氣質は千種萬態の差別あるが中にも貫ふ物ならば夏の日だに小袖の端をさへに難有しといたゞき大黒[2]見る様な笑貌をして取込み出すのは懐手も虫が好ぬと毘沙門に似たる澁面して傍向くさりとは御了簡針の穴の小さい事にまで焼急と熱なりて爪に火を點す吝嗇な人あれば金故には他の足をすくツて涙の川へ突いて落すを毛程も痛しと見ぬは未なり大事の嚴夫可愛の稚子に浮目を見せるさへ左までに思はぬ肩から爪の生た強慾者もあるべし二者共に是守錢奴の謗を免れぬ無慾に似たる大慾の人なり予が記したる草紙の主人公は右兩種の前者に屬しつべき小氣なる吝嗇者の一人にして彼西の國の識者が「人の金錢

を求むるは種々の所願を成ぜんが爲なり金錢の貴きは只此故なり」と言初てより今は皆人の誦んじたる世間に有ふれた理にさへ暗く握ツたら最期鐵拳開くことなき金の威光は慾張の敷紙に包まれて外へ現ぜず徒らに人間の望を斷ちて生涯を樂しと送ることもあらねば究竟は貧者とわく所なし哀れや果は苦の垣の下に散て根に返る人々よ年の初の初夢と共に早く迷の覺よかしと爾云者は

春のやのかゝりうど　　嵯峨のやおむろ

明治二十年一月初旬

【本文】

浮世人情　守錢奴の肚[1]

春のや主人補助
嵯峨の家おむろ著

○第壹回

東京の町廣しといへど。かゝる大きな路次。他所にはあるまじ。路次といへば路次。横町といへば横町。路次には廣く横町には狹し。因て大路次と世俗はいふなり。唯神田邊とばかり。所は何處なるか判然とは分明らず。近頃此處に一珍事あり。路次中の誰彼か。それを語次ぎ言囃して。今は合壁[2]にて知らぬものもなし。此方に二ッ三ッ

の頭鼻突合す所。必ず其噂。彼方に四五の首額を集むるところ。矢張其噂。そも是如何様なる珍事なるぞ。と例の作者氣の兎耳。探索した結果マア如左なり。

先づ其路次の摸様をいへば。南の入口にぶら下りたるは。雇人[4]受宿の長い看板。隣に筋かひに張られたるは。貸間あり山下氏の紙札。猥者通行無用と。骨々楷書で杉板への書風。これは[5]差配どのゝお腕前と見えたり。ヌツト路次口を這入ツてゆけば。右側三軒目に槻の格子戸。貸夜具貸蒲團の小さひ牌。内々小金貸もするとの事。これらが偽詐ある招牌なるべし。隣も同様な格子戸附。偏瓢齋燕口とは。名ばかり[6]釋師めいた扇子叩き。其筋向ひは一軒家。長家をかけ離れた二間間口。一間の窓一間の江一格子。[8]根府川の沓脱に女の駒下駄。チヨツトのぞかるゝ軒先には。例の紋散しの丸提燈。清元延羽根とは尻軽さうな名前。其又直向ふの腰障子には。文字さへ威勢張ツた[11]凧流。飛白ツて鳶金と筆太に書いたは。勇の大哥のおましどころ。北の路次口の角の家は。立派な藏作の一搆へ。店藏のほかに奥庫一棟。入口には質屋の看板。家名の三星屋を染めぬいた紺暖簾。チラ〳〵ホラ〳〵と飄へれど。牖の鐵格子の堅い身代。地主兼帯の大屋どの。正しく此邊での殿さま株なるべし。路次の中間には大きな[12]車井戸。屋根を結搆ひしは雨天の用心。此は世間並の建風なれど。ちと定規に外たのは。丈夫も丈夫なる鐵鎖の井戸縄。これはどうじやいの。差配人の儉約歟。定めし「汲み悪くツて重くツて」ト店子の壁訴[13]訟がたへぬなるべし。井戸に付いて東へ入れば。又ぞろこの所に細い路次あり。角は醜からぬ離れ家。表は大路次と向ひし格子戸。横ては半障子と勝手口にて。件の井戸の方へ臨みたる建方。原来此井水はきはめて上水。それゆゑ大路次と小路次は勿論。表通裏通。いづれもわざ〳〵来てこゝより斟む。されば早朝はことさらに雑沓。[14]荷擔を

擔いで来る酒家の若者。手桶を提げて去る長家の山の神。五分刈の丁稚は水を汲みし番手桶を振り廻はして水の溢れざるを自慢し。[17]花繡の大哥は都々一をうなりていやに「はゞ」をきかす「おはやう」の聲は笑ひ聲に交りて聞えず「ワーイ」とはやす小供の聲「覺ていろ」とわめく小僧の聲。共にからみあツてがや〳〵ワヤ〳〵。但し混雑もほんの一時。やがて芝居ならばカチカチカヽチ。黒幕バッタリト切て落せば。但見る一個の年の若い下女。其体格はといへは矮軀肥満。米のかしき桶は前にしても。手は口程に働かぬ磨ぎ振。[18]旭日三竿の井戸側だけに陰と日向のある奉公根性。右手に立ツて居るお三どんに向ひ。ホンに譯けもない人の噂（下）お牧さん昨日はお樂み。おまへ芝居へ往たつてネェ。面白かつたろう。どこのへ（牧）[20]千歳座へ往たの（下）オヤさうよかつたろうネエ。[21]音羽屋は。あの位又うまい役者はないわ。わたしは菊五郎大の贔負さ。ホラいつかエーと[22]何屋とかの小松ツていふ藝者ネ。あれを演た時なんざアなかつたとネエ。どんなに好つたさうだヨ」と炊桶の縁へ摑まりのびあかりながらいふ（牧）たいさう御贔負だネ。ダガお前なんぞにひいきにされちやア。菊五郎も泣だろう（下）ア、泣くとサ。嘻し泣きにハくく○じやうだんはおいてネ。お前のとこなんざア羨ましいヨ。御内儀さんがさばけてるから。さうやつて劇場なんぞへ往かれるがネ。わたしのとこなんざアおじやんだ。芝居どころか朝から晩まで。劍突と小言で……アアつく〳〵いやだヨ（牧）さうわるくお言でないヨ（少し聲をひそめて）三星屋を御覽な。あんなとこへ来合せた奉公人こそ因果だヨ。御膳のおかずも澤菴がヤツトダとサ（下）そりやさうだけれどあんなとかアめつたにありやアしなイヨ。ありやア別ものサ（牧）それでもお前のとこにやアいゝ事があらアネ。こんだ直きそこへ清元の師匠が轉居来たから。裏坐敷に居たら歌ふのが聞えるだろう（下）ア、聞えるヨ（牧）たいそういゝ

聲だツてネエ（下）ア、聲もいゝがネ第一容貌がいゝやネ（牧）さうだツてネ私家の旦那なんざアさういツてるんだヨ「どうか町内の若者に。けがゞ出来なきやアいゝ」て。ダガあの……折柄五六歳の男の兒表通りの方へチヨコ〳〵（牧）オヤ坊ツちやん。アラあぶウございますヨ引。「機會に角の一軒家の腰障子を。威勢よくガラリツと開けて立出るは。年頃二十四五の男。顔は稍平たき方隆とした鼻。莞爾とした口。殊に黒眼勝で透明とした美男子。されど[23]相中の殿さま同様。威望と人品のおはしまさぬは腦中無一物のしからしむる所か。マア〳〵安直な御人物。痩形にして並体の格好。[24]唐棧の袷は前幅狹く。[25]疊付の駒下駄は鼻緒細し。きりゝと結んだ[26]八反の三尺。前で蜻蛉形を爲し。ふわツと肩にとまる淺黄の手拭。昨日おろしたかいと新し。蓋し思ふに金泊付の職人。色の白いのは居職の故なり。職人は手水盥を流しに置き。楊枝を使ひながら下女に向ひ。ズツト真地目な兒にて（職）お里さんおまへの家は。ア、何屋だツけなア（下）エ。なぜエ豆腐屋サ（職）ヘーおりや又油屋かと思つた（下）なぜ（職）なぜツて。お前は井戸端へ来るたんびに。油ばかり賣てるじやアネエか（下）イヤナ平さんだヨ。さういふお前はなんだイ。今ごろ起てからに。自分の頭の蠅でも……（平）ヘンおれのは稀だ。お前なア毎日だハくく今日はオイ何時間かかつたイ。米エ磨なア（下）大きにお世話。さつきといぢやツたい（平）それじや今迄何を……ヲイ〳〵逃るにやア及ばネエ。オイ〳〵

折から向ふより勇の職人。お定まりの紺の股引。[28]盲縞の腹掛大紋の半纏。二尺五寸の手拭を四ツに折て。鷲摑みの突かけ草履（平）勝。ヤイもう仕事か（勝）ウム。手めへ今起たのか（平）ウム（勝）チヨツ。ぼんやりしてゐやアがるなア。手めへゆんべどけへ往た。師匠のとけへこなかつたじやアネエか（平）さうヨ。手前たちの様

に。稽古所ぺいり許りして。其顔で師匠に思ひつかれ様とかなんとか。つまらなく氣を採む連中たア。ヘン譯が違わア。此方ア昨夕なんざアズーツと彼の所から。是非来て頂戴テナ手紙ヨ。それから綱引後押の六人引で。ヌーツト繰込みツといふ位なもんだア（勝）洒落たことをいふなイ。手前の様な一文なしで。どうはゞたきが出来るもんか。皆と昨日さういつてたんだぜ「平公め毎日〳〵鼻[29]の下をどうじ格子にしやアがつて。師匠のとけへばかししけこむくせに。今夜に限てこねエのは。なんでもこひつア本所の伯父か何にかにとツつかまつて。頭からこきおろされてるにちげいねエて」だうだい當ツたらう。どうだい〳〵（平）馬鹿を言へイ。そんな平ちやんじやアネエヤ。悪評判記をしやアがるなア○こつちや昨夜なんざア感心なもんだぜ。京橋の隱居のとこまで此間の印形を持ち込んで来たのだ（勝）ざまア見やがれ。吉原へ往たなんて。迂そばかしつきやアがらア○フム（と鼻て笑ひ）あの隱居じやア苦茶を飲ませられて。薄片な羊羮一切で。[30]滅法界なげい談議を聞せられたらう（平）ウム。驚いたぜ。なげい間他を坐らせやがつて。堪忍して仕事を精出せのなんのと。いやに知た風をしやアがつて陳糞漢の語詫をつきヤがらアな。面白くもねエ。人の心も知らネエで。あんな馬の爪はありやしねエ（馬のつめとはわからぬ人といふことなりその心は馬のつめは先きがわかれていねばなり）あいつア三星屋の老爺の向を張てらア（勝）可愛さうにさう悪く言なさんなイ。あれでもあの隱居は氣障は氣障だが。慾は深かアねエや。凡そ慾が深いツていやア。三星屋の主人ヨ。あんな慾の深い奴アありやアしねエぜ（平）ウム三星屋も三星屋だが。隱居も平さんのお氣にやアめさネエ。いやアに手前味噌の自慢交りで意見めいたことをぬかしやアがるから。こつちやア得意場だと思ばこそ。がまんをして聽て居りやア。いゝ氣に成やアがつて喋りやアがらアナ。アゝのべつじや

たてきれネヱヤ（勝）こぼすない〳〵。昨夕師匠がさういつてたぜ「なぜ今夜ア平ちやんは来ないのだらうツて。聊御心配ヨ（平）へ。畜生メ。さうだろう。ぜんてい師匠はおれに。トーント来てゐるからな。一日でも顔を見せなきヤ。病氣になる騒ぎだ「昨日別れてまだ今日なれど。遭ねばどうも此……胸……が。とかなんとかなつてるんだ。どうだい恐れ入たか。驚いたらう。色師の開山業平文治[31]たアおれのこツたア。おめへたちも女の子に思ひつかれ加減を知りたきヤ傳習してやるから習に来ネヱ（勝）ヤイ〳〵まだ目が覺めねエのか。馬拔めエ。他様の前で外聞が見ツとも悪ヤ。早く頭から水を……（平）コウ見や。来たぜ……「こゝへやつて来たは四十八九の男眦は少し計り下ツた形。目は三角眉毛はへの字。大きな口。厚い唇。値價のある所は色の白いのにて。通ツた鼻筋は景物とも見るべし。額の波。目の縁のこじわ。妻君其人を除くの外ハ。マヅ〳〵手をひいて買口には囮らじ。ぎよろりツとした目。テカ〳〵とした頭。小兒が見たならば泣出すべし。脊は高くして痩肉。雙子[32]の袷二子の羽織。桐の駒下駄は疊を嫌ひ。黒革の鼻緒は太きを尊ぶ。どこの旦那どので如何なる人かは。いまだ判然とはいひがたけれど。兎に角慾の字には縁のある打扮。金には盲縞の前垂を締て。そこらを睨まわしてドウマ聲[33]をだし「ヨイ。ヨイ。〳〵金坊。金ヤ……溝板の上を…踊ちやアいけねい。踊ちやア……ヨイヨイ。コレサ〳〵井戸流しへ……ヨイ乗られちやア困るヨ」平は勃然として無言で流シより下りる。勝。平と目をみあはせ。そこ〳〵井戸端を立離れながら（勝）フン。又生姜めが[34]」山下に下宿の書生。手に金盥を持ち。二人連立て笑ながら来る。甲の書生は井戸端に近より（甲）「コリヤア恐入ツた。實に恐入ツた」と何か大層に恐入ツて忽地金盥を「ぢやんぢやらんぢやらん」「生姜」の足下へ放り出せば「エ、亂暴なやつ靜にしろツ」と肚ではいひたい

が山々さうな眼色。されども言ひかねた八ツ當りを。頂戴いたしたるは傍への四斗樽並に置忘の糠味噌桶なり（生）チヨツ。又こんなとこへ桶なんぞを……ダカラ水が流れねいのだ。モシ（平に向ひ）こりやア何奴……誰れが持て来たか。モシヤおまへ知りませんかな（平）知りませんわつちやア……（小声で）そんな番はしねヱヤ。べら……（生）ア、これじやア流シが。ア、たまらない譯だ……ヨウ〳〵モウ朽かけて居らア（平）はあちら向いて舌をベロり。やがてうぬが家へひつこんだり。

書生は楊枝を使ひながら四方を憚らぬ高調子（甲）實に恐れ入ツた君の熱心には。……常は臥てゐて顔が洗ひたいなんていふくせに「やつ」を見んが爲めに殊更此處まで来る。いや實に鼻の下は長いなア（乙）インニヤ我輩決して鼻下長にあらずサ。君は近眼でよう分明んから。我輩のことを笑ふけんど。君をして若し遠視眼ならしめば。我輩に謝したじやらうヨ（甲）さう君は言ふがねエ。僕ア過日は目鏡を掛けとつたから。遠目の人と同じ事だが……（乙）マア黙して見チヨリ給へ。今歸途に此處を通行するから（生）邪摩ツ氣な處に置きやアがるから……チヨツ此邊へ押附けておこうか……ウントコ（頻に四斗樽を荷厄介にしてゐる）（乙）フン如何にも彼女は美だノウ。妍たる其容貌。嬌たる其細腰。彼佛王路易「十九世」を掌裡に弄んだ「エリサベス」其人の如き。唐の玄宗の心を惱ましたる。楊貴妃其人の如きも。如何ぞ彼に若かんやダ。一見人を惱殺するネ。明眸皓齒蛾眉豊頰。國色てのは彼れのことじや。我輩生れてから未ダ如此き美人を見んヨ（甲）イヤハヤあきれかへツたネ。そりやネものは見やうで色々サ。青い目鏡を掛けて見りや何んでも青く見える。赤けりや赤く見える如くサ。君もいゝと思ふて見るから。無闇によく見えるんだヨ。そりや竒麗は竒麗か知らんが。品がないやネ。それから見るとヘ、ン

〳〵（といッて笑ッて居る）（乙）なにがへゝンだい（甲）何がツて薄雲などは。さすがは元が士族だけ。どつか品が有るネ（乙）オツト朝からのろけか止めイ〳〵（甲）のろけじやない品評だから。マア聴給へ。其上芙蓉の面貌に柳の眉と来てゐるからネエ。あんな莫連たア一所になりヤしない。辛氣辛苦の苦海の中で。僕に……ヘン泥中の蓮たアあれの事だらう（乙）馬鹿ア。君こそは偏見だて。我輩なア公平無私だからノウ。遊女などは數の外だ○ア、實ニ彼は美だ。殊に婀娜だ。所謂る粋にして意氣なるものだ。我輩過日彼に道で遇たが。秋波一轉妙に我輩を迎へたて。なんでも彼は我輩に意ありだヨ（甲）（金盥を突と差出し）サア水鏡と御相談○エ。涎が垂れらア。涎れが（乙）だまれ〳〵ア、来た来た」

いかさま向ふより人来れり。真に一人の美婦人来れり。容貌は絶倫いゝといふにはあらねど。當世向の丸ぽちや顔。色はくツきりと白。眉は細ツそりと三ケ月形。もみ上濃く生際厚し。目の清しいのはいふだけ野暮なり。總て顔の中のしまり宜しく。造作きちんとして口元可愛らし。慾には今少しアノ鼻がと思へど。これも世間並の出来合形。低いツと力を入れていふ程にもあらず。之を要するに中肉中脊の仇者。[35]めいせんの袷に長襦袢といふこしらへ。帯は黒繻子に[36]博多の[37]腹合せ。[38]パツとした大縞の半纏は。たしかに「メヒキ」[39]した南部と覺しく。[40]光が脱になつて夜目遠目ばかり。思ふに三四年前の上被の化物着附は頓帳[41]の芝居めけど品物は中歌舞妓のたておやま[42]妙に男好のする風なり。年齢は十九か二十の新造。どうせ黒い奴と知られたり。乙の書生は目迎へて之を送り。甲は含みたる水を吐出し。一寸見ぬふりにて横さまに睨む。小首を傾けて苦い兒で井戸の車ばかり見て居たりし例の生姜どのも此時になりて覺えず喋々しい風説につられてジーツと新造の兒見結め居たり。新造は井戸の前を通りながら。

二人の書生をずうと見廻はしやがて生姜どのと顔を合せ。小腰を屈めてたちまち莞爾。目は口程に働き。口は金よりも力ありと覺しく。流石の「生姜」どのも苦い兒でニツコリ。「これはお早う」斯て横兒を横目で見て。ジツト立たまゝで後姿を見送り。後姿を見送りて小首を傾けやがて井戸端の小言を中止し。口をへの字にして考へながら。彼方へそろそろとあるいてゆく（乙）オイどうじやイ。美じやらう（甲）なんの美なことは有やアせん。並だ。ダガ少し婀娜だ（乙）美でないことがあるものか。其が証據には見イ。たつた今三星屋の爺でさへ。彼に見惚れちよツたじやないか（其内甲は顔洗ひ終れば乙代はりて洗ひながら）諸君ヨ諸君ヨ婀娜たる彼の態度。嬋妍たる彼の容貌には。三星屋の老父其人の如き。木石と一般なる頑固的の人物も。心を迷わすに至る。此一事以て彼の美を証すべしだ（甲）こりや恐れ入ツた。こりや恐れたネ。三星屋は迷わんが。君が迷ふちよるでさう見えるんだ（乙）馬鹿アいへ。大丈夫何ゾ一婦人に迷溺せんや只愛するのみじや○だが不思議じやアて。三星屋の老爺が見惚れちよツたのは。

○第二回

抑三星屋の旦那どのは。如何なれば何として。斯様に井戸端の立話しにも。しば〳〵借屋者の口の端にかゝるぞ。其爲人は果して如何。生れついての強慾者にて。貪りて飽くことなく。握ツたら放す事なし。他は轉ばふが起きやうが。そんな事には頓着なし。只自分のみが仕合なれば。外はどのやうでもかまひませぬト。ズツト他事には達磨様氣取。面壁九年母[43]の様な禿頭になるまで。細君其人を除くの外は。女に肌ふれぬ[44]石部流義。お菜の香物さへ經濟の爲とて。常に齒にのらぬ堅いのを選ぶ。明治の世にあつても昔形氣。頑固で堅い身代。總身が慾

氣のみで固まツた人物。慾が老爺か。老爺が慾か無形の慾といふ一性情が。蓋し此老爺と化たものと思はる。人間としては片輪者ならんが。慾の精靈としては圓満完全。偶然慾界より此土に化現し。當今慾教の擴張さいちう。サツテモ熱心ヨト噂取リ〴〵。されどもこれは是皮相の觀察。まだ〳〵實相を洞察ざる仇口。兎角に世の中の噂ばなしは。針を棒程に罵しるが常。或はなきことをも御大層に現に有る樣に言ひ觸らすが癖。市に虎をいだす先例もあれば。ウツカリ人の口は當にならず。

我等は三星屋の主人の氣質は。果して如何やうなるものにやと思ひて深くも其腦裏にしのび入りて洞察に。生得氣の小さひ智慧の弱い人間。心に適はざることあるときには。獨りくよ〳〵と苦勞するが性分。蛇は一寸にして其氣をあらはす。されば此人は幼少より。只管私利のみを是經營て。他の不幸をかまはぬ氣象。利己の傾を現はせしといふなり。斯樣に小膽と利己の主義とが。妙に相合して成熟せしかば。やうやく壯年に至るに及んでは。更に吝嗇の原素をうみだし。別に狐疑心をも貯ふるにいたれり。さればこそ毫の失敗。つまらぬ過誤をなしてさへも。さも御大層な後悔三昧。斯く〳〵せしならば。斯る失敗はなかりしものを。かう〳〵計りしならば。かやうな過誤はあらざりしものを。とかくに七くどう繰返すが癖なり。又彼事を某に依頼せしが。よもや狡猾ことは行まじと思へど……イヤイヤ計り難きは人心なり。なか〳〵に心は許せぬ。ハテナ何としたらよからうか。と兎角氣を揉むのが常住なり「某は妻を娶り。年を重ぬるに從ひ。子ができ借金ができ。竟に斯々に落魄れしとか。某は節儉家なりしが。「カヽア」がヒキヅリにて不取締なるゆゑ。とうとうみすぼらしくなツたとの噂。チヨロ〳〵兩耳にはさむにつけて。ます〳〵世渡りの六日敷を感じつ。吝嗇の心は次第につのりぬさすが弱年

の折柄は様々のことをも氣にかけしが。今は心配も一方に偏して。只管金溜にのみ屈宅して。粗食を厭はず粗服を嫌はず。たゞ溜ることの嬉しさに。面白い事もせねば面白い物も見ず。ショッチウ「お金さま」を拝み通し。殊に何事も人に任さず。己れ直接に其事に當れば。墓がゆくやうでたしかさうなれど。所謂分業が行はれず。自然不經濟の事もあれど。そこには秋毫ばかりも氣の附かぬはいとをし。斯る性質の男なれば。己より貧しき者といへば赤の他人には勿論ながら。親類縁者出入の者。さては年来の奉公人にも。兎角情愛なく無愛相にて。ものゝ言様身の振舞。總じて「ツンケン」にて持切ッたり。されどさはいへど人間は人間なり。まさかに慾のみにて活動するにはあらず。あらたまの年立返る春の日に。霞棚引くを打詠めては……百花の爛たるを打見やりては……或は晴渡る秋の夜に。月の玲なるを仰見ては……或は朗かなるの朝ぼらけに。群雀の囀るを打聴ては……或は木嵐の聲さびしく。細雨のたそがれよりふりつゞきて。夜深て物凄うなりたる頃には……氣韵なにとなう高尚になりて。卑しき心さへも清々しくなり。狭き了見だにどこともなく優くなることもありけんかし。されども其はたゞ雲時のことなり。銅貨のぢヤラ〳〵と鳴渡るをきけば……算盤のパチ〳〵と音するを聴けば。かゝる高尚なる怪しの感じは。たちまち瞬間に消失して。影もなく跡も止めず。又慾心のみ募り来りて。單に吝の蝸窟に墮落し。火宅を脱すること決して能ず。未来永劫浮ぶ瀬なく。例の溜主義の奴隷となる。扨も笑止なる人物といふべし酒は性来嗜まざれども。たとへば甘き物戀しくなりて。「ムシツ」が走るやうに思ふときにも。二一天[46]作と計算して。多分は紙幣を見てすましておくなり。斯くても制しきれぬ様になれば。少々日限の早いのにもかまはず。暗に催促の下稽古かた〳〵。金を貸せし家へでかけて往き。ドツシリすはりこみて茶を求めぬ。斯くして菓

子をさへにしてやるなり。されば便利なる世にありても。氷は葬禮の伴にたちて。圖らず御馳走になりし以来。別に自腹にて飲たる事なく。人力にも乘らねば馬車は猶更なり。冬も手あぶりを用ふるのみ。けつして臺所の下女なんどに。火鉢をあてがひたる事もなければ。熱い白湯さへに飲ましたる事なし。時々客があれば據ろなく。やツと十匁の茶をいだせど。それさへ一度入れて十五度は出すなり。たま〳〵茶の香ひのたしかなる時分に「小僧ヤ。チヨイト番頭を呼んでくんな……上茶がはいつた」トハ畢生の愛想。天氣も變はるべき上機嫌の時なり。總てが其様なる暮しぶり此餘は推察してしらるゝこそよけれ。原来三星屋は家号にして。姓は大川名は喜右衛門。當年齢四十六歳。苦勞性の故か四十八九にも見えけり。其身分と身代を尋ぬるに。幼少の砌父母に死別。質屋の丁稚となり年頃に至りて妻を娶り。やがて此處に質店を開きぬ。今は一町四方餘の地所と家作とを所有し。其上高利貸をするとの事なり。期日に至る時は猶豫をせず。きびしく利を催促るに怠なければ。月々の實入ステキな者にて。家は年ましにゆたかになれど。己れも此金を利用することを知らず。單に守番人となり果てゐるは。はたで視る目には笑止千萬。されども御當人は大満足。是なん最上の快樂と覺しく。獨り臥床にて胸算用。折々ニコ〳〵して嬉しがる兒を。小僧の長松が見附たりといふなり。さはいへ此様なる快樂のうちには。何か物足らぬ所あるにや。何やら淋しげなる趣あり。思ふに一圖意に金を思ふて。心に和ぎのなき故なるか。或は快樂の同轍にして。更に變化なきに因事ならん歟之れをば今あらはに示しがたけれど。件の不足らしき一種の感じは。此人三十になりけるとき。俄に二年越の妻を失ひ。それより又一層に増りし様なり。此女房は田舎物にて。頗る愚直なる女にして。殊によく働く人間なりしが。毎日香物でたてきりし故か身体がだん〳〵に衰へゆき

て。買ひ藥の療養も其効なく。墓なく遠いとこへ立出しなりけり。其當坐は喜右衛門も相談相手のなくなりしと。葬禮の費用のかゝりしとを。幾度となくうちかこちて痛く落膽せし樣子なりしが。淋しと思ひたるも霎時が程にて。後には各主義に氣を取られて。死したる妻さへに思ひださねば。更に後妻を迎へんともせず「お金」をだきかゝへて餘念もなし。去れどしかすがに物淋しき。雨のふりつゞく真夜中などには「アレ」が居たならばと思ふこともあるべし。

過る日井戸繩の切れける折。それを鉄鎖に取かへなば屢切れるといふ憂ひなく。出入で莫大の利徳なりと聽き。喜右衛門いかさまと感心して。早速井戸繩を掛替しが。後につら〳〵と思ひ見れば。かくては井戸車がいたむ譯なり。早く惡くなりはすまじきや。ト心附きて氣を揉み氣を揉み出しては矢も楯もたまらず。其夜の明果るを待ちかねつゝ。今日しも井戸端に出かけたりしに。書生がやかましく美人々々と。大層やかましく騒ぎたつるは。そもまた如何やうなる美人にやあらん。と覺えず近寄り来る女を見れば。這は是近き頃さる處より。自己の持家へ轉住し者にて。過日一面會したる事ある。清元の師匠延羽根なり。其折は何の氣も附かず「たゞの店子なり。店賃の納め方は……マア〳〵中の字であるべけれ」とそんなそのよな事考へしのみにて。何の異な思想もあらざりしが。此日はどうしたのか如何せしにや。今までたべた事のない感情が。少々ムラ〳〵と浮びたるぞをかしき。

○第三回

夜は森々と深け渡りぬ。万籟死し天地寂たり。人も横に仆。艸木も眠りぬ。されば無情なる行燈さへ。燈心一本の心細さに。やう〳〵眠たき歟ぼんやり乎たり。薄暗き六疊の奥の間。燈の前に一脚の古机あり。其上には

四ツ五ツの帳面。臥床は真中に敷のべてあれども。主人はいかゞせし歟影も見えず。床の間に掛けたるは大黒の像なり。こいつ此家の主人と同じく。俵をふんまへて番をするのが。餘つ程恐悦の事と見えて。黒く董つた面附ながらに。ニコ〳〵ニコ〳〵は氣の知れぬ神なり。處で總体の質素に似合はず。贅澤の沙汰と見るは五色の壁なり。五色の壁といへば奢侈の沙汰なれど。種を洗ふては吝嗇の沙汰なり。反古で張りたる邊年經て黒み。塵紙の蓋ふ所古びて赤し。[47]淺草紙やう〳〵しらちやけ。鼠の小便の跡は夕立の雲めき。端の方幾分か黄みたるやうなり。こゝへ新聞紙が仲間入せざるは。曽て此家の店先へは「[48]ちりン」が音信たる事なしと見えたり。押入の傍なるは黒塗の昔簞笥。たしかに天保度の製造品なるべし。上には手丈夫なる用簞笥。持佛と相並んで安置せらる。怪しや無用心に押入の戸半右の方へ開かけたり。但見る怪しむべし黒きものあり。内にてムク〳〵と蠢めき居る様子。犬か猫か將た賊か。孤燈はいやましに薄昏うなりて。光はなか〳〵に此處までは届かず。暫くして黒きものは。徐々退歩を始めたる様子。始めは忽然と臀がツン出ぬ。其より腰がでぬ。脊がでぬ肩がでぬ。最後に黒い頭ヌツト出て。直躬と立上は……あたりまへの人間なり。何やら十文字にからげたる物を。右手にひつかゝへて四方を見廻はし。やがて行燈の前にしやがみぬ。こはそも[49]五右衛門の後胤なるか。將た又[50]熊坂の亞流なるか。五右衛門にしては[51]百日鬘がなし。熊坂にしては髪の毛が變なり。うつむきているゆゑ顔は見えねど。あたまのテカ〳〵で勘定つければ。エ、何のこツた。苦しうない者。即ち當主人の喜右衛門にぞありける

斯くて十文字にからげしものを。やがて手をかけて解かんとせしが（心の裡）イヤ誰か内々で見てゐやアせぬか……ナアニ真夜中だ。誰が見てゐ……る……イヤさうでない。見世の者が起て居るかもしれぬて。一寸あちらの様子を

……」さし足窃足して歩む度毎。体をイヤに前へ曲げ。さながら玩具の亀子の如く。首を肩の中へ入れたり出したり。そろり〳〵障子の傍。餘り前にこゞみ過ぎて。たちまち我着物の裾を踏へ。思ずヨロ〳〵とよろめく機會に。おのれか肩骨で障子を「ドーン。」「エヽ」と喫驚りして耳をおさへ。やがて手をはなして苦笑ひをなし。障子に耳を當てゝホク〳〵うなづき「ヘン皆[52]白川夜船だ。フヽン。フヽン。」又もや首を肩の中へすぼめ。やをらたち戻りて机の前。更に結び目を釋きかくれば。庭に向ひたる雨戸が。ガタピシドコ〳〵〳〵。喜右衛門は胸ぎつくり（心）ヤ盗賊じやアないか。こんな晩にやア盗賊が……」（庭の方に方りて猫の鳴聲「ニヤア〳〵」）「エヽ猫めだ驚かせやがつて。畜生メ。イヤ……だが……盗賊が来たので猫が……ム、さうかも……驚いて……かも知れんて。万一盗賊ならば……大變だ」ト包を両手にて押へたりしが。四邊は寂寞として水を打たるが如し（心）まさか盗賊じやあるまい……ガ……エヽ一寸見て……戸を開けるも無氣味ださうだ。窓のすきからムヽ」そろ〳〵と立ち上りて障子を開け椽側傳ひに二足三足。窓の隙間から向ふをのぞく。折しも誰が家の猫か垣を飛越て去りぬ（心）エヽ矢ツ張猫だ。馬鹿なつまらねエ心配をさせやがつた」又そろ〳〵と坐敷へ戻り。障子へ大事さうに両手を掛け。音のせぬ様にソツト閉め。かくて机の前に坐らんとして坐らず。小首を傾け（心）待てヨ皆寝て居る様だが。獨位は店で。目の覺てるやつが……一ツ呼んで見てやらう「オイ誰……（心）イヤ……呼ぶなアいゝが……返辭をされた時どぎまぎしちやア……ありやアどうした。さうさ聞くのがいゝ。コート何か聞くやうな用が……ウムさうだ」（シヤン〳〵と手を叩く）エヽトなんだツけな。エヽ切角考へたことを。ホイ忘れてしまツたぞ。エヽチヨツ。おれもよつぽと。さう〳〵「燕口はまだ歸らないか」さうだつけ。さうだつけ……オイ誰か[53]

起てゐないか。オイ〳〵（室内闃として返事なし）（心）ヘンうまいぞうまいぞ。よく眠てゐると見える」（机の前に坐りて結び目を釋く。中の物は二重三重の澁紙包なり。一ツ〳〵に釋きほぐして。漸く取出すは紙幣の束なり。いづれも五圓札なるべし。之を一束づゝ一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、と數へ（心）先ヅ千四百圓そこで今月の地代と家賃……貸金の利子……合せて二百圓餘り此内一百を千四百圓の方へ繰込んで……ハテナ。どうしたものかなア。千五百圓で。公債證書を……イヤよさう。公債は此節値が上ツてゐるから。千五百圓じやア。コート千三百何十圓それツぱかりでは嬉しくない。其上[55]抽籤にでも當ツた日にやア損だ……大損だ。よしたが割のやうだな會社の株かな。イヤ〳〵株は……近頃の會社。それこそ不安心なものだ。繁昌の内はいゝが。少し左前……身代限……イヤけんのん〳〵。シカシハゝく世の中は色々だ。金が無くツて困まツてるものもあれば。おれの様に金の遣り所によわるものもあるてハ、、時にエート。何か考へてゐたツけが……世間の貧乏人は定めし……ホイそんなことアどうでもいゝのだ。ツイ〳〵横道へそれるもんだから。兎角工夫が……矢張長家を建て。家もいゝが火が……一番慥なのは地面だ地面地面。これに限る。利は薄いが地面イヤ待てよ地面も宜いが相場の狂ひが怖いてエイみんな癈めろみんな一番安心なゝア仕舞て置のださうだ矢張元の所ろへ」（千五百圓の紙幣を八重に包み十文字に縛りて。立揚る折柄。天井で鼠がガタ〳〵」（心）ヒヤア。鼠か（押入の中の根太をあぐれば。内に手丈夫なる藏シ押入あり。ひそかに其中へ包を藏めて（心）かうして置けば氣づかひなし（押入より這出で）（心）そこで此百圓は矢張帳面へくるんで。用簞笥の引出し……（用簞笥へ入れて）こいつもこれでよし。アゝかへツてかうやつて出し放しの方が。他の目につかんで……（時計の音チンチン）（心）

ア、夜が更けた。寝よう〳〵（しづかに机を片隅へ押遣り。暫く床の間の方に向ひて。大黒天を禮拝なし。やがて立揚りて床の中へ這入り。正に消かゝつたる燈を吹消す。されどもたゞちに眠り得ぬなるべし。

（心）まづ地所を買ウと決て……そこで月々の入費は僅なものだ。這入ツて来る金は。コート。フム甘いぞ。差引ともかくも月には二本半。さうすると一年にはこれが……三千圓。十年じや三万圓。イヤ利に利が重なるから。三万圓じやきかない。五七三十五。六八四十八。さうだ四万圓にやア……こいつア甘いな」（霎時の間は餘念もなく。四万圓の三字のみ腦中を走け廻りしが又妄想）これに付てもお里　みまかりし女房の名なり）がなア生て居たら。どんなに嬉しがるだらう。又お里位よく働く女は……ア、年月のたつは早いものだ。モウコート。十五年イヤ十六年……おれが三十の春さうするとおれも齡が……老少は不定だ。あんな丈夫な女が……病氣にでもなつちやア女に限る。お里なんざアそこへいつちやア。骨を惜まず働……ア、女なんざアいくら容貌が好くつても。働なくツちやだめだ。器量で……ア、妖色といへば。こんど裏長家へ越して来た女は。清元の師匠は……成程ありやアいゝ女だ。皆が騒ぐが好女だテ。今日おれの兒を見て莞爾と笑ツたが……（此時喜右衛門の腦鏡に今朝見し可愛らしき目元口元。忽焉として現れたり。流石の喜右衛門も恍然として。慾氣の魂膽は何處へやらゆきて。霎時は夢の如く幻の如く。睡氣ざせし如く。もたれたるが如く。黙然目を閉ぢて胸は有耶無耶。稍ありて目を開き（心）なんだあんな女は。容貌がよからうがわるからうが。己の女房じやアなし。子じやアなし。どうだツてかまふもんか。勝手にしやアがれだ。稼業が稼業だから必ず贅澤だ。そりやア其筈か。商賣が商賣だから。師匠なんぞをするやつだから。清元の師匠なんぞを……どうせ。ろくな奴じやアありやア……ダガ元はなにもの

だらう。親父は……コート。たしかない……ないんだ。いつかの戸籍で……お阿母と二人暮し。東京府平民……士族あがり……矢ッ張り元からの商人かも知れんテ。親父の存生てる時分はこまらなかつたから。あの娘に稽古をさせたが。親父が死だので食ふにこまる。ところが親心で藝者にするのはいやだ……○馬鹿な奴だ藝者にすりやア金に……娼妓に……娼妓に賣ればいゝんだ○そこで當人の望みで。清元の師匠。藝と器量がいゝから。男の弟子は勿論。女弟子も……こゝらがいかさま藝が身を助ける……いかさまさうだらう。そんな事だらうテ……シテ見ると感心だな。なかなか金儲の腕があらア。こりやア一概にけなしたものでも……（折しも枕もとの時計チンチンチン）オヤ三時か。大へんに夜が更けたな……シカシ感心な譯だ。女の腕で……ダガべらぼうな器量がよからうが藝があらうが。三文にもなりやしまいし……だがあの娘の腕で。家の生活を……さうすると三文どころじやアないかナ。ヘン世の中は種々だ。あんなことでも飯が食らア。ダガあんなことをしてゐるものは。どうも年よりは若く見えるな。籍じや二十一とか二とかだが。十八九にしきやア見えな……シカシ三文にも……十八九に……三文にも……見……え……な……あとはモヤ〳〵と夢になりぬ。

○第四田

斯くて喜右衛門は埒のあかぬ疊算[56]。益も無き穿鑿に。ゴーギと夜の時[58]を殺したりしが餘の事に疲れてや暫[57]とろ〳〵と睡むるかと思ふと忽地コチリ〳〵雨戸に音あり喜右衛門は目をパツチリ。ハテ心得ぬと耳を澄せばミチリと椽側に上る足音喜右衛門は恟ツとして扨こそ盗賊歟と思ふとひとしく恰も電氣にでも打たれたる如くぶる〳〵ツと總身に震ひが出て夜具を引かつげど胸はドキ〳〵頭はヂン〳〵。目はマジ〳〵。心はドギマギ。耳はガン

〳〵。何事も好くは聞えず。されどもどうやら障子を開けて坐敷へ這入ツて来る氣合がするゆゑ喜右衛門はブル〳〵もの夢中で両足をしつかと組合せ両手で夜具の袖をギツシリ掴みて念佛やら題目やら息を呑殺してどう成ること歟と心を痛め居る其内に。坐敷を歩くにや足音ミシ〳〵金を仕舞置きし戸棚の前にて忽地パツタリと止まりたり扨こそあの千五百圓を盗みに来たなあれを奪られてはト起んとするに五体は盤石で壓へられた様に毫も毫末も動くことは出来ずコハ口惜し援を呼ばんとあせれど氣を揉めど聲は出でず徒づらに息のみつまりて総身に冷汗が出るのみなり暫くしてまた足者。扨は首尾好くも金を持出しマンマと逃去るのかそれやツてはと一生懸命總身の活力を舌根に込めて盗賊とばかり一聲叫んで夜着をはねのけて起んとする間に一個の曲者が突然に現はれ兼て懐に呑んで居たる九寸五分仕立のおあつらへの相口抜手鋭く「エイヤツ」と一喝して横に拂ひし刃の電光喜右衛門の首は彼方へコロリ○ア痛ツと頸を撫ゆればこはそも如何にこは不思議なんのことだ首は元の儘に御安泰なり扨は今のは夢なるかと夜具をはねのけんと身をあせれば誰とは知らずおのれの肩に片足かけて動さぬものありア、苦しやともかく機會に裏の方にてドボンと井戸の中に身を投る鈎瓶の音。うツ、の中に聞き取りて「ア彼の音は」ト目を開けは秋の夜いつしかに明け離れて戸隙を漏れて室内にさし込む日の光りに障子のさんも算へられ大黒の繪像さへ明かに拝まれぬ嗚呼「こはかつた」と胸に手を當てるに動悸未ダ鎮らずして冷汗全身にジクジクたり再び靜に四邊を見るに別に變りし体もなければ吐息と共に思ふ様滴々辛苦のあの千五百圓を無情の賊に奪れしかと思ひしこと此明方の夢ならんとは實に嬉しや喜ばしや是といふも日頃から大黒様を信心の御蔭に因りて我家へは盗賊なんどは這込らぬこと歟思へば貴とや難有やと滅法ステキト難有がり大黒天を伏拝みしがイヤ勿体ない

恐れ多い卧て居ておがむとはアタ滅[59]相なト起出て手早くまづ衣服を改めつゝ奥の間の雨戸をクワラ〳〵と引開くれば家内中は目を覺し店では手代小僧が動き出す臺所では下婢がガタピシ喜右衛門は臺所に往き棚の上なる壷の塩を抓み出し人指指で齒を磨きながら竈の下のくすぶるを見てなぜ能く燃さぬゑぶしたとて濟したことはなきものを薪費なトの口小言をまたかと下女は聞流しの盥に水を汲んで差出せば喜右衛門は顔を洗ひやがて様子を見にとて店へ出づるに一個の小僧の店を掃くとて紙ツ切を芥と一所に掃きおろすを見て忽に目を剝出し「コリヤ音吉なぜ紙を掃き出のだ紙は紙屑籠へ入れるものだ無性者めと叱り付られて青菜に塩ヘイ〳〵と小僧は紙切拾ふて籠へ入れる此方では番頭手代が何やら「トツパクサ」[60]と働く流石は物馴たもの抜目なく爲てのければこれのみは先づ小言の難をのがれたり表に居た丁稚の落度は犬にあるか忽ち其尻ツ尾をつかまれたり「長松また白にかまつてるか早く往ツて水汲めと叱られても平氣の平左（長）[61]ずいとこきやア叱られてもかまうことはないサイコドン〳〵〳〵ドン」と流行歌で去る後影を苦りきつて見送りながら傍の當頭に向ひ獨語の様に（喜）チヨツ此節の小僧どもは昔と違ツてどうも生意氣で主人を馬鹿にしてアゝこれも時勢とやらか仕方がないの」といへど番頭は只へイ〳〵といふのみ喜右衛門は手持無沙汰の様子なりしが「ア大黒様に」と思ひ出し奥の間へ取て返し繪像の前に手をつかへ何やらムニヤ〳〵と口の内眼を閉ぢて祈念せしがやがて身を起すと箒を取て室内を掃除すこれは奉公人を働かせる廣大無邊の計略兎角する内朝飯も出来て下女膳をかきすゆる飯に添ふは味噌汁と澤菴の香物汁は簿く塩は辛しと知るべし扨食事をすますと店の帳場格子にドツカと坐を搆へ嘉永年間にでも購ひしか此頃は見馴ぬ煙草入より一斤十錢程の莨を抓み出し厂首の曲ツた真鍮の煙管へ好加減つめてはこれを環に吹きジロリ〳〵と

見世の者の働き振を見張て居るさりとは氣樂なお身の上と他目に思ふと大違ひ心の内では種々の御思案（心）ハテナ今日は日本橋まで往て来ようか其とも郵便を出し……イヤ郵便では二錢……アヽ先搆ひのを……待よそれもちと……ア往た方が好それに嚴敷掛合ふにはさうだ〳〵往くと爲やう往くと……あの家の嗅アくらゐ喰へぬ奴はないテ他が往くとマアおあがんなさいそれから只今亭主は出ましてのお定り文句誠に相濟みませんのお氣の毒様のヤレ御機嫌よくのとお世事の百萬駄羅を並べ立てゝ人を丸めようと思やアがツて外のものは其手で誤魔化されるか知らんがおれは……今日は嚴敷かけやつてさうサ斯う談し付て呉よう半金でも好から今日は是非入れろ若し其がならずば裁判沙汰にするが如何じやと頭から一ツ高飛車に……コイツが一番だコイツがフンさうだフンフヽン（折から若者チヨイと喜右衛門の顔を見るに驚いて笑を呑み込み）此節の借方はどうも世話がやけて困る「てこ」でも動かんのだから……アヽさういへば燕口如何しやアがつたか今日でモウ十日も經つがまだ歸らぬテ万一とかけ落でもしは……正可さうでもないかの」なんどゝ無益の苦勞種を求めて心田に蒔き其をほぜりだして解剖穿鑿兎やせん角やせんと肚の裏の工夫がやう〳〵決定する頃に至れば早や已に九時頃なり遲くなりしとて打驚き衣服を改めると番頭に向ひて一寸出掛ますぞ

竹の棒切を小脇にかゝへ込み「屯所へ来いツ」ト力む五分刈のをとこの兒におぞくもいぢめられて「馬鹿ヤイ」と逃げ出すカブツキリのをんなの子は路次の溝板をがたつかせて走る盲縞の袷で尻ツ端折徒跣に草鞋を穿き四ツ五ツの徳利を右手に提げたる酒家の御用が「三河屋でござい」と角から鳴り込む朝日はお向家の屋根よりも高く軒に下げたる御神燈の影はいつしか障子よりすべり落て半月の形を沓脱に印しぬ件の延羽根の家の前を今しも通り[62]

かゝる質屋の喜右衛門昨夜床の中で思ひし事忽地フラ〳〵と胸に浮びて見るともなしに打見やれば時も時とて主人の延羽根恰ど出格子に身を倚せて窓なる鉢植を眺めてありしが此時何氣もなく表を見るとて機會に喜右衛門と顔バツタリ流石に其處は商賣柄延羽根は小腰をかゞめ莞爾微笑む美しさ朝日を受し横皃の微紅とした櫻色には鉢植の菊もテレたる様なり喜右衛門も一寸と會釋し足早に往き過ぎしが小石に躓きヨロ〳〵（心）「アヽ何だツてハツと思ツたか知ら變痴氣な事があるものだ何もあの女が窓に立て居たツて不思議なことはない……菊を見て居たがなんだあんな鉢をつまらない贅澤なイヤだが菊も悪いものではないテ只なら彼もなか〳〵いゝテア彼女も面は何してなか〳〵……あの位の女は少くない（と向ふを打見やりて）向ふから来る女は如何だ痘痕だらけヲヤ〳〵あの年増はなんだ口が尖がらがツてまるで狐の様な顔だ好女は……ホヽウ彼處へ来る新造は……イヤ頭髪が氣に入らぬ束髪だダガ束髪は櫛簪油エート笄なんぞが入らんから徳かな（と見やる向にに一軒の下駄屋家根より高く懸げた大看板）なんだあの繪は傘に下駄に駒下駄歟それに大安賣笠雨堂か剛的ト巨大看板だナ……なんだ八錢五厘（下駄屋の前に立ちどまり）歟桐の駒下駄の穿ばかりの物がシカシ桐の下駄ア、贅澤な直に磨滅ア損なもんだアヽ久しく出掛なかツたらイヤ大層に新店が出来たわへなんだ此小さい看板は白髪染め藥毛はへ藥新發明髢止本舗かへン本舗もすさまじい小さな店のくせに見掛で驚かすつもりが恐しいダガ毛はへ藥とは思ひ付だなだん〳〵人間が……利口ではない贅澤と狡猾なるのだ……アそりやア宜いがどう歟先方が居て呉ればよいが○去程に往くとも知らず来るともなくいつしか筋違の大通へと出ぬ後より雲ならなくに何の雷ぞ轟然として走せ来る鐵道馬車思案に暮はてゝ此方はウツカリ喜右衛門老は早々と線路の中を往く「ドケイ爺さん」と御者の怒鳴

るに「ハツト」驚き傍へ退き眉を顰めて「ナニ」と言ひたさうに口を尖らし三角の目を四角にして馬車の後影を見送る向ふに一個の男何事に感心したのだか金物屋の店を一生懸命に覗き込んでコソ〳〵走るやうに走らぬやうに歩いてゆく喜右衛門目早くも之を認めて忽ち顰めたる眉を開き尖らせし口を直し突と走せよりしが又急に顔をしかめ（喜）オイ燕口さんこれは好所てあつた（燕）オヤ（と驚きし□で）旦那コリヤ御機嫌よう」（と丁寧に腰を屈めて會釋すれど此方は勃然して）（喜）コー燕口さん御機嫌ようもねへ物だ他を馬鹿にしなさんな全体何處へ何處へ往ツて居たンだ（燕）ヘイ〳〵」と下俯き駒下駄で砂利を摩ツて居れば（喜）今日は幾日だと思ひなさる十月の七日だが先月の末までといふ約束のを煙とふけられてはこまるじやないか何處へ往て居たンだ」と蝙蝠傘の先でトン〳〵地を叩く燕口は此時沙利の中より一個の小石を探出しそれを駒下駄て轉ばして居たるが一寸顔を上げ（燕）ヱヽアノなんで御座り舛實はあの……イヤ實にヘイ寔にそりやア實に申譯がヘイあの實は何で伯母が九死一生の大病だト申して電報が參つたもんですから取るものも取合へず飛出しちやツたもんでツイ御無沙汰を致しまして相濟ません譯でヘイ寔に何ともヘイ〳〵（喜）其ならばそれト何故前以て斷んなさらん遠い處じやアあるまい目と鼻の間で…（燕）どうも何ともヘイ寔にヘイ恐れ入ましたが何しろ九死一生と来たやうな譯なもんですからツイ何でツイお斷にも出ません譯で（折から二三臺の人力車横町より「ガラ〳〵〳〵）（車夫）ゴツサイ〳〵あぶねへな引鈍兒メ（喜）チヨツ此處は雑沓で話しも出来ん一体お前は…これから家へ歸るのであらうの（燕）イヘ瀬戸物町まで參ります（喜）ヱ瀬戸物町……何の用があるか知らんが私が見付たからにやア歸ツて貰はうイヤ金のかたが付ない内は…是非一旦歸ツて貰はう（燕）そりやアモウ私が惡いんですから何と被仰ツても

仕方はありませんが家へ往たッて金の才覺は唯今直といつては……（喜）出来…出来ないで濟まされるもんか宜しい斯しようお前の知人の家へこれから同道して往きませうヨそうすりやア兔に角に出来さうなもんだの私も色々と用はあるがマ仕方がない其方は明日まで延すから」と言はれて燕口は益々困りて「不意だから免喰ッた殘念〳〵しい」といふ樣な顏色にて先刻から轉して居たる罪も報もなき石を「ポン」と蹴飛し（燕）どうもそれも當てには…（喜）そんなこと言はれてたまるもんかマア兔も角も歸て貰はうエ歸ンなさいいといふに（燕）チョッ（卜舌打をしかけて氣がつき）チョ…チョチョッとそれぢやア歸りませう」斯て兩人は相並んで元来し道へ引返す相方暫くは無言なり燕口は始終俯向きて只時々チョイ〳〵と相手の皃を見るのみ喜右衛門は苦りきつて折々燕口の皃を覗き込む樣にして眉毛の下から睨み付るやがて喜右衛門先づ口を開き（喜）それでは何だねお前は今迄伯母御の家へ往ッてゐた譯だの（燕）ヘイ左樣で（喜）ぜんたい伯母御といふのは家は何處だな（燕）夫やなんですあの何で……アノ近在なんですがね（喜）近在…フム近在とは…（燕）近在は……雜司ケ谷です雜司ケ谷で（喜）ヘーその雜司ケ谷へ往ッたお前が何で今頃此處らを……（燕）そひッアイへそりやア何で……斯ういふ譯なんで其伯母がとう〳〵「まいつた」もんですから其からあなた葬式騷ぎでよう〳〵終して昨日師匠（講釋の師をいふ）處まで歸ッて来ましたやうな譯で何にしろ旦那の方の金の工面がつかないもんですから家へ歸ることも出来ねヘッといふ樣な譯で……（と頭を撫でゝ神妙げにいふ）（喜）ハ、引さう聞いて見りやア何やら一通は道理のやうだがいくら周章たにしろ無斷で居なくなるとはしどい不都合だましてあの金はお前の方からもどれぱ直に外へ廻はす約束が出来てる夫を此樣に違約されちやア目前目の前に一圓がたの損だ何して一圓じやアおッつかない位だ（燕）どうもなん

と決してその横着氣で居なくなつたツていふ譯じやないんで…（喜）そんな言譯は聞いても無益だが所で金の方は如何してくださる今日中に是非都合をして貰はにやアならない（燕）どうも今日中とおつしやられると私やア如何も方がつきませんが何か二三日待て戴きたいもんでヘイ二三日たてばまた工夫の…（喜）オイ〳〵燕口さん紺屋[64]の明後日は聞飽たさんざツぱら氣を揉ませて置て今更待て来れは何の口でいふのだド、どうでも今日は都合[65]して貰はうと稍聲を高くするに燕口は少しく皃色をかへしが又咳拂をして顔を和げ（燕）私もたつた獨の伯母に死なれたもんですから何んだか恍惚してしまツたやうな譯で金才覺どころじやア…イヤ何も當がない譯ですから何卒二三日お待なすつて其代はりエエとかうだに因て何なんですそれじやア旦那斯してください私も男だ借た金を返さないたア言はねい私の家に先祖傳来の秘藏の寳物がありやすあいつを低當[66]に延して貰ひませう」と少し角立ツて顔を赤くすれば喜右衛門は性来が小膽なれば何やら氣味が悪くなりしと見え忽地鼻の下を少し延ばしてキヨロ〳〵燕口の顔を眺め（喜）そりやアネそりやアモウ何なりとも慥な品でさへあれば何さ取ないとはいはん値打のある物なら預らない事はない何さ取るヨ取りますがネ知つてる通り此節はなんだて古物の取引が嚴重いから（燕）旦那品は慥なもんですエー私の家だツて元は士族だ先祖代々の重寳を手離しちやア先祖の位牌へ對して濟まない譯だが切迫詰ツちやア仕方がない思ひ切て質入するんで真成の價は五十圓がものは…」話の内にいつか我大路次の前に来る但視ると五十格好の一個の老女彼方より来りしが燕口と顔見合せて立止まり（老）オヤ燕口さん暫く何處へ往て居たの五六日見えなかつたネ（燕）イヤこれは雜司ケ谷の方へ據處なくネ（老）さうかへ（と言ひながら喜右衛門に一寸會釋しまた燕口に向ひ）今にお出なさい」と去る（喜）燕口さんあれは何だらう師

匠のお母だらう彼處の（燕）さうです（喜）お前あの人とは心易いのかい（燕）ヘン私なんざア方々になじみは澤山あります其といふがマ奇麗に交際からです彼處の家なんぞとは親類同様にして居るんです」（と我家の前へ立止まり）それじやア旦那只今持て出ますから一足お先へお歸んなすつて下さい（喜）なアに直きだらう少し待て居ようヨ」と角口に立て居る燕口「ヂロリ」と見て（燕）御心配にやア及びません何處へもゝう往きやアしませんから」と打笑ひ兩隣へ何だかくど〳〵と留主中の挨拶を爲しやがて我家へ入りしが暫くすると風呂敷へ包たる四角のものを持ち来り（燕）旦那お待どうさまでしたさア參りませうと言へど喜右衛門は「アヽ」と言ひしのみ寶といふは如何なもの早く見たいと思ふて風呂敷の上から中實を見透す積でゞもあるか「ジツト」見詰める其風マア五ツ六ツの子供がお隣から貰つた重箱の中はなんだらうとおさな心のせ話しなさに指を加へ首を延ばして蓋を取るのを見る様なり」

注釈

【表紙】

1　春の屋主人　春の屋おぼろ。坪内逍遙の別号。

【他序】

1　赤にし　けちな人。吝嗇家。

2　聖門の教　聖人の教え。孔子の教え。

3　紀文　江戸時代の豪商、紀国屋文左衛門のこと。

4　ツン出る　とび出る。

【自序】

1　妙智力　本来は、観音菩薩の持つすぐれた知力のこと。

2　大黒　大黒天のこと。

3　毘沙門　毘沙門天のこと。

4　彼西の國の識者　イギリスの経済学者、アダム・スミスを指すと思われる。石川暎作の翻訳による『富國論第二卷』（明治一八年五月、經濟學講習會）には、「人ノ貨幣ヲ欲スルハ貨幣其物ヲ欲スルニ非ズ貨幣ヲ以テ購ヘ得ルモノヲ欲スルニ由ルナリ」（第四篇）とある。

5　春のやのかゝりうど　「かかりうど」は居候のこと。嵯峨の屋は、明治十九年十月から明治二十年十二月まで、坪内逍遙のもとで書生として生活していた。

【本文】

1　しまりみせ　締店。本来は、資金ぐりがしっかりしている信用のある店のこと。ここでは、「守銭奴」と同じ意味を持たせている。

2　合壁　壁一つで仕切られた隣り同士。近隣。

3　兎耳　人の隠し事をうまく聞き出すこと。地獄耳。
4　受宿　雇い人などの身元を引き受けて職の世話をする家。口入れ屋。
5　差配　持ち主の代わりに貸家などの管理をする人。
6　釋師　講釈師のこと。
7　江一格子　江市屋格子のこと。細い桟を縦に狭い間隔で打ちつけてあり、中からは外が見えるが、外からは中が見えにくい。
8　根府川　根府川石のこと。神奈川県小田原市根府川で産出される安山岩の石材。敷石などに利用される。
9　紋散し　紋を一面に散らして模様としたもの。
10　腰障子　下の部分が板張りになっている障子。
11　凧流　江戸で凧に文字を描く場合によく使われたような図案化された書体。
12　車井戸　滑車に綱をかけ、その両端につけた釣瓶で水を汲み上げる井戸。
13　壁訴訟　ひとりでぐちを言うこと。
14　荷擔　担い桶のこと。天秤棒でかついで運ぶ大きな桶。
15　山の神　妻のこと。
16　番手桶　雑巾がけなどに用いる粗製の手桶。
17　花繡　入れ墨のこと。

18　旭日三竿　日が高く昇った状態。

19　お三どん　下女のこと。

20　千歳座　久松座が改称して明治十八年一月に新築開場した劇場。明治二十三年五月に火災により焼失。後に明治座として新築開場する。

21　音羽屋　「おとわや」。歌舞伎俳優の五代目尾上菊五郎。

22　何屋とかの小松ツていふ藝者　河竹黙阿弥作「戀闇鵜飼燎（こいのやみうかいのかがりび）」に登場する新常磐屋の芸者小松。「戀闇鵜飼燎」は、明治十九年五月、千歳座で初演。その際、五代目尾上菊五郎が小松を演じた。

23　相中　江戸時代から明治時代にかけての役者の階級の一つ。下級の役者をさす。

24　唐桟　唐桟留（さんとめ）のこと。桟留縞（さんとめじま）ともいう。赤や紺を主とした細かい縞が特徴の綿織物。高価なものであり、通人の羽織や着物に用いられた。

25　畳付　表面を畳表で覆ったもの。

26　八反　八端織のこと。黄色と褐色の縦横の縞模様が特徴の絹織物。地が厚く、帯などに珍重された。

27　三尺　三尺帯のこと。職人たちが用いた。

28　盲縞　紺無地の綿織物。作業用の足袋や脚絆、職人の腹掛けなどに用いられた。

29　鼻の下をどうじ格子にする　鼻の下を伸ばすことをいう。「童子格子」は、子持ち筋のある太い格子縞のこと。

30　滅法界　「滅法」と同じ。程度がはなはだしいこと。

31　業平文治　三遊亭圓朝作の落語「業平文治漂流奇談」の主人公、本所業平村の浪島文治郎のこと。近所の娘たちに騒がれるほどの色男。「業平文治漂流奇談」は、明治十二年四月、「業平文辭松達攝（なりひらぶんじみさおのたてひき）」として春木座で上演。また、明治十八年十一月には、若林珀藏の筆記による速記本として刊行された。

32　雙子　「二子」と同じ。双子織のこと。双子糸を使って平織りにした綿織物。

33　ドウマ聲　胴間声。調子はずれの濁った太い声。

34　生姜　けちな人。

35　めいせん　銘仙。平織りの絹織物。丈夫で安価なことから、女性の普段着などに用いられた。

36　黒繻子　黒い繻子織りの織物。繻子織りは、表面が滑らかで光沢がある。

37　博多　博多織のこと。博多地方で織られる絹織物。練り糸を使った平織りで、地合が硬く光沢がある。帯地などに用いられ、江戸末期にかけて全国に流行した。

38　腹合せ　腹合わせ帯のこと。表と裏を別の布地で仕立てた帯。

39　メヒキ　地色や模様が色あせたり汚れたりしたものを、染め直すこと。

40　南部　南部織のこと。南部地方に産する紬や縮緬の織物。

41　頓帳の芝居　緞帳芝居。江戸時代、引き幕を許されずに垂れ幕を用いた下等な芝居。小芝居。

42　たておやま　立女形。歌舞伎で、一座の女形の中で最高位の俳優。

43　九年母　「くねんぼ」。ミカンに似た果実。橙色の果皮は厚く、表面はでこぼこしている。古典落語の演目に

も「九年母」がある。ここでは、達磨の「面壁九年」と「九年母」を掛けている。

44 石部　石部金吉。極端に堅物で融通がきかない人物のこと。

45 ヒキヅリ　「引き摺り」。着飾ってばかりいて働かない女を、あざけっていう語。

46 二一天作　二一天作の五。旧式珠算での割算の九九の一つ。

47 淺草紙　廃紙をすき返して作った最下等のちり紙。

48 ちりン　新聞を配達する人。当時の新聞は、配達人が「ちりんちりん箱」と呼ばれる鈴をつけたはさみ箱を担いで配達していた。

49 五右衛門　石川五右衛門。安土桃山時代の大盗賊といわれる。江戸時代には、浄瑠璃や歌舞伎など多くの作品の題材となった。

50 熊坂　熊坂長範。平安時代末期の伝説的な盗賊。源義経に討ち取られたという伝承が流布し、幸若舞や謡曲に登場する。江戸時代には、浄瑠璃や歌舞伎など多くの作品の題材となった。

51 百日鬘　歌舞伎の鬘の一つ。盗賊や囚人の役に用いる。

52 白川夜船　ぐっすり寝込んでいて何も気づかないこと。

53 コート　「こうと」。思い迷ったときに発する語。さあて。ええと。

54 澁紙　張り合わせて柿渋を塗った紙。敷物や荷物の包み紙などに用いた。

55 抽籤　公債の抽選償還のくじ。

56　疊算　畳で行う占い。かんざしなどを畳の上に投げ、落ちた所から畳の縁までの編み目を数え、その奇数・偶数で物事の是非・吉凶を占う。主に遊里で行なわれた。

57　ゴーギ　「豪儀」または「強気」。程度がはなはだしいこと。

58　時を殺す　時間をつぶす。英語やフランス語、ロシア語などにこのような表現がある。

59　アタ　「あた」。不快や嫌悪の気持ちを表す語に付いて、その程度のはなはだしさを強調する。

60　トツパクサ　「とっぱくさ」。せわしく動く様子を表す。

61　ずいとこきやア叱られてもかまうことはないサイコドン〳〵〳〵ドン　明治十九年頃に流行したとされる「サイコドン節」の一節「ずいとこきゃ　言わいでも構うこたない　サイコドン　サイコドン　サイコドンドン」をもじったもの。

62　カブツキリ　「かぶっ切り」。かぶろ切りのこと。髪の毛を肩のあたりで切りそろえた、子供の髪型。

63　ゴツサイ　「ごっさい」。人力車が通る際、車夫が周囲に注意を促すためにかけた掛け声。

64　紺屋の明後日　紺屋の仕事は天候に左右されるために仕上がりが遅れがちで、いつも「あさって」と言い逃れることから、約束の期限のあてにならないこと。

65　さんざツぱら　「さんざっぱら」。「さんざん」を強めた表現。ひどく。

66　ひきあて　「引き当て」。抵当、担保のこと。

（本文「第五回」以降の翻刻と注釈は次号に掲載予定）